

---

風

yuuka

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風

### 【Nコード】

N1619F

### 【作者名】

y u k a

### 【あらすじ】

魔王に支配された世界、アルビリオン。その世界を救うために10人の少年少女が立ちあがる。

## プロローグ（前書き）

修正してみましたー^^

## ブローグ

風が通りすぎる。

魂をさらって行ってしまいそうな強く、でも優しい風。  
その風は雲を、木々を、人を動かす。

雲が空に包まれる。

そこに悠々と飛ぶ黒いカラス。

淡い色とそこにある小さな黒い点。

自分とは違う色の中に、違う世界の中に一生懸命生きている。

なぜ？

今、空を見上げている僕らとは違う。

今の僕らは自分の世界に違う色がある事を拒む。

忌み嫌い、消し去る。

その色が自分たちを拒んでいなくとも。

その色が何の害が無くとも。

その色が僕らを望んでいても。

その色を消そうとする。

一緒に生きようと考えない。

考えられない。

生きられない。

人間とはこんなものだ。

人間が一番下等だ。

自分たちだけでは生きられないくせに。

他の物を下等と見下すくせに。

でも、僕らは旅に出る。

下等な者は旅に出る。

## 第一話 始まりの風（前書き）

過去の自分に笑いがでます^^  
今のにも^^wwww

## 第一話 始まりの風

何でだよ？可笑しいだろ？

何で好き勝手やっている人間に殺されそうにならずにちゃいけないんだよ？

俺は何もやっていない。

笑える。

目の前にはさつき俺の部屋に入ってきた男が一人いた。仲間を殺した。

一人きりの自称勇者は涙目でこちらを睨め付けていた。

人間とは脆いものだな。所詮一人では何も出来ない。

カトウ。

「覚悟しろ！魔王！」

勇者は大剣を持つ手に力を込める。

「この聖剣で貴様を！！よくもッ！よくもおおおッ！」

勇者の声がする。躍りになったか。

大剣を持ちながら憎くてたまらない俺に向かって走ってくる。

勝手に濡れ衣を着せないでほしい。

「俺は魔王ではない、カイルだ。覚えておけ」

俺は口の端をつり上げた笑顔を消さないままそう言い放つ。

今すぐ殺したい。

俺が町を破壊するよう命令したって？

俺は全ての魔物に命令する権限を持つてるわけじゃない。

俺だって知らない魔物もいる。俺に従わない魔物もいる。

人間とは、何処までも愚かな物だな。知ってる物が全てではない。

自分にも半分人間の血が流れているのかと思うと嫌になるな。

俺がそう考えていると、何かが風を切る音がした。

甘い。隙があるとでも思ったか。

勇者が大剣を振り下ろそうとした瞬間、その後ろに黒いモノ、ガ

「ゴイルが降り立つ。」

黒い羽の生えた魔物だ。元は銅像だったらしい。

「カイル様。こやつはどうします？何なら私が……」

「いい。その必要はない」

ガーゴイルに皆まで言わせず、自らそう言っただけ呪文、通称呪歌を小声で唱える。

大剣には簡単に魔法が掛かった。

ホントに甘いな。

こんなやつでガーゴイルの手を煩わせる事はない。ガーゴイルが可哀想だ。

「これじゃないな」

一人つぶやく。

勇者はこんな物を聖剣と信じ込んでいたのか。愚かで、可哀想で、苛々する。ムカつく。

笑顔を消して、相手を睨め付ける。

「では、死んで貰うぞ」

そう言っただけ大剣を操る。

魔法の欠片もないじゃないか。

その上、切れ味が悪い。

「うわあっ！」

勇者は大声を上げる。

自分の物が言うことを聞かない事に驚いているのか。

歯も立たない事に驚いてるのか。

自分の死に恐怖してるのか。

シネ。

「あああああああああ」

誰も仲間がいない所で助けを求める。

所詮無駄だ。

今でも勇者はあれを聖剣だと信じているのだろうか？  
ピンチの時に助けしてくれると信じているのだろうか？



ここまで来ると笑えてくる。

そう思いながら首元を掻き切る。

掻き切ると言っても切れ味が悪すぎるせいで叩き切るといった所か。  
鮮血があちこちに飛び散る。

薄汚い血でカーペットが汚れた。

下等な血でカーペットが汚れた。

叩き切ったせいで肉片がそこに飛び散った。

筋肉の筋も飛んでいる。

苛々する。

「しねしねしねしね

っ！」

苛々する。

死んでいるのは知っているが苛々する。

薄汚い血で汚れた大剣で切る、叩く、刺す、潰す。

その度に下等な血が流れる。

そこから辺に飛び散る。

10メートルほど離れていたはずなのに薄汚い血が俺の頬にふれる。

「随分やりましたね」

ガーゴイルは丁寧な口調で言う。

「少々、苛ついたからな」

俺がそう答えると言う事は分かっているとでも言いたげな目で

「何処がですか？」

と聞いてきた。

「自分が一番強いと思っているところ」

俺がそう言うのとガーゴイルが笑った。

口がビンゴ！と動いた気がする。

きつと俺もそうだ等と考えているんだろう。

「ふっ」

「な、何がおかしい！」

きつと、俺の顔は赤いだろう。

ガーゴイルはもう笑ってこそいないが、俺をおもしろそうに見なが

ら言った。

「片付けておきます。カイル様」

「ああ。頼む」

そう言っただけ俺はその場から消えた。

何でだ？何で俺らの村が。

俺らの村がこんなになってるんだ？

燃えている。

破壊されている。

何もかも。

「お、い」

シャガが言う。

俺らの村は崩れていた。

焼けていた。燃えていた。

どの家も跡形もなくなっていた。

もう、家など無い。

「どうして？なんで私たちの村が」

コスモスがつぶやく。

みんな瞳に涙を浮かべていた。

当たり前だろう。生まれてからずっといた場所、死ぬまで居るはず

だった所。

さっきまで、さっきまであったはずなのだ。

なのに、

なのになんでだよ？

なんで俺は泣けない？

涙さえ出てこないじゃないか。

「静かに」

ムギが何かに気づいたように口に人差し指を当てた。

ムギの声は震えていた。悲しみか、怒りかは分からない。

「なんだよ」

「まあ良いから。キキヨウ、見ろよあれ」

ムツとするキキヨウに向かってムギが言う。ムギが指をさした方向には幼い女の子が居た。

泣いている。

必死に何かを探しているように見えた。

少し走ってはあたりを見渡し、しきりに何かを探している。

「ママー、パパー。何処行つたのー？一人はやだよー！」

この村に住んでいるスミレだった。

声が震えている。頬には涙らしき物が見えた。

同い年の子はいなかったから俺らが一緒に遊んであげていた子だった。

このままでは危ない！そう思い、スミレの所に掛けだそうとする。

そんな俺に横から手が伸びてきた。

ムギの手だった。しかも、俺の方を向いて口に人差し指を当てていた。

行くなという事だろう。

なぜ？と目で問いてみる。

首を振られた。助からない……………つと言う事か？

「多分殺されたんだろう」

ムギがキキヨウに向かって言う。

「親が？」

「多分。だけど、問題はそこじゃない。来るぞ」

「何が？」

「見てれば分かる」

何が来るかは分からない。

爆発するのか？急に倒れるのか？それとも

「おい。チビ」

スマレの後ろには何かが立っていた。

人間のような何か

その何かが俺の、否俺たちの期待を裏切る事はなかった。

## 第一話 始まりの風（後書き）

ぐはっ！

下手すぎて修正時間がかかるっ！

多分修正終わりましたぁーっ！！

た・ぶ・ん

## 第二話 決意の風（前書き）

思えば遠くへ……………来て居ない；

## 第二話 決意の風

そこに居たのはゴブリンだった。

肌は茶色く、髪らしき物は見あたらない。

背は高く、筋肉質。

身につけている物と言えば深緑色の腰布ぐらい。斧を持っていた。最後にスマレを見たのはそこまでだった。

「きゃあああ!!」

目を背けた。見て見ぬふりをした。

それっきり、スマレの声は聞こえなくなった。

悲鳴さえも聞こえない。何も。息遣いさえしない。

「手間掛けさせやがって」

くぐもった様な声でそう言ってゴブリンは去っていった。

「行つたみたいだ」

唯一見ていたムギが言う。

さっきまでスマレがいたところには何も立っていなかった。

木がじゃまで見えない。

「スマレは?!」

心配になつて走り出す。

まさかっ!

そこには、スマレの代わりに無惨な物が転がっていた。

多分、元はスマレだった。

目を見開いたまま、口を大きく開けたまま。

死んでいた。

殺されたんだ……。

「何なんだよ。何で」

シャガが言う。

みんなも悔しそうだった。

アサガオとヒルガオが泣き出した。

ムギだつて泣いている。

タンポポだつて。

俺だつて泣きたいさ。

「知らないよ！つらいのはあんなだけじゃ無いんだから！」

いつもはにこにこ笑っているヒマワリが珍しく怒鳴った。

敵に見つかるといふ危険を知っていながら。

その目には、涙が浮かんでいた。

そして、深い悲しみと湧き出すような怒りがあつた。

「つらいのは……あんなだけじゃ……無いんだから」

魔王がいることは知っていた。

手下の魔物たちの事もよく知っていた。

都会がねらわれているのも知っていた。

ここは大丈夫だと思っていた。

田舎なんて襲わないと思っていた。

考えが甘かつた。

大丈夫なんかじゃなかつた。

ここだつて世界の一部なんだ。

いつかは狙われることも目に見えていた。

もっと修行をしていれば……みんな……助かつたのに。

後悔なら余るほどしている。

何で、何で！

俺が甘かつたんだ！

「大丈夫。あなたのせいじゃないから、シオン」

コスモスがにこりと笑つて言った。

自分だつて悲しいのに。

言葉自体は短かつたし、特別な意味が込められている訳じゃなかつた。

けど、嬉しかった。

元気づけられた。

後悔が無くなつたわけでもない。



ましてや村が元通りになつたわけでも、  
でも、俺にはまだ仲間がいる。  
みんなの方を見ると笑いかけてくれた。  
さっきまで泣いてたアサガオとヒルガオも。  
みんなの目の奥はまだ泣いていた。  
なのに元気づけてくれた。  
もう、こんなふうに悲しむ人は見たくない。  
魔王を倒す。そう決意した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1619f/>

---

風

2010年12月8日11時05分発行